

牛店
雜談

安

愚

樂

鍋

一名

奴

論

建

初

編



一の字恒魯文著

牛店
雜談
安愚
木鶴初編

一名奴
綸建

雑談

安愚樂鑑 初編 自序

庚辰新刊

世界各國の諺に。佛蘭西の着倒も並

吉利は食たふれと食基ふ並べく譜と

衣ハ肌と覆ふの器。食ハ命と繋ぐ乃錯

心は猿の意馬止く。咲く櫻の花より團

子。色則是食色気より。餐氣を前の佳味

肉食牛に飛ぶまじく膳好方便佛徒家乃

五戒きらんぱ。虚と實の内外を西洋風味よ

索混て世ふ克熟甘口と作者例の自己

味噌家言もあゝの不果放行彼小便の十八町

慢く地急案即席調理刺葱の五分ほども

透ぬ則量のタレ安味生肉の替りへ爰聞みて。

一帙端を採めくと文明開化商店の告
條めりしに演述にまゐ

明治四歲辛未乃卯月初の五日

東京本石街萬笈閣の隠居に於て

牛の煉藥黒牡丹の製主

假名垣魯文題







牛の氷湖道入
煉茶
黒牡丹
賣出

子竹
旗

アとリしと

アとリしと

それやまは

いゝ葉ある

アとリ

あふま

IOLE

牛店
雜談

安愚樂鍋初編全

一名 奴論建

東京市隱

假名垣魯文戲著

開場

天地ハ萬物の父母。人ハ萬物の靈故ゆゑに五穀草木鳥
 獸魚肉是ガ食トスル自然の理ゆゑこれヲ食スル
 人の性なり。昔くの里諺ハ盲文爺のたぬき汁。因果應
 報穢ヲ淨むるカモつく山ノ切火打。何ぞ玉とさだむ
 及勿。未とヒリテ食刀。とろつ、利七、五羊斗里

その功能も深見草牡丹紅葉の季ときついで猪より
 さびたらく歩行も遅くも怠り往來絶ざる
 浅草通行御藏前お定舗の名も高旗の牛肉
 鍋十人よき十種の注文昨晚もてゝ味噌と
 拳あきたきときをせる朝あさ歸り生なまのかり法しき粹じゆんり
 連中れんぢゆう西洋書生漢學者流劉訓りゆうくん似に之の儒者じゆぢやあ
 色いろ省せう柏はくめめを僧そうもり士農工商老若男女賢
 良りやう富ふのとへこ。卡かう爾に食くへ多おほく用もち比ひ下くだ焦やう又またと

鳥トリをたに郷きょうの蝙蝠傘こうぶつさん。鳶とび合羽がひの翅つばさをむ海うみをあく

遠とほからん者ものへ人力車ぢきや。近ちかくい錢湯せんとう。帰かへり藥くすり。喰く牛乳ぎゅうにゅう。乾かん

酪らく洋名やうめい乳油にゅうあぶら。洋名やうめい牛陽ぎゅうやう。もこゆぎに勇ゆう。潔けつ。彼かの肉陣にくじんの兵へい

狼ろうと土産どさんに買かひふり最多いとおおき人ひとの出入でいりの賑にぎへいくく込こ

合あの節せつ。前まへ後ご御用捨ごんようすて。御懐中物ごくわうちうぶつ。御用心ごんしん。銚子しやうしのおららるら

か會計けいけい。か帰かへるらままのい入いラらツつ。ああのの実じつ。小流行せうりやうのい益えき。夜やを

捨すてをな繫けい。昌しやう斯しのお如ごとくにああんん。ささままばば牛うしへらししつつ。乃な

司し氣き。りり。るる肉にく。食く洋集やうしゅう。席せきと区別くべつ。ありありささと。

清潔せいじやくみのりをとるせりぬまで喰くりなかつたのでこッせら
西洋せいやうで六千六百二三十年まゑ前まへより喰くふやうになり
やしくそのまじの牛うしや羊ひつねはその國くにの王わうの全權ぜんけんと
云いふ家老けらうのやうな人ひとをさけ置おかす人ひとの口くちに
遠入たゝやせんのを返かへす我國わがくにの文明開化ぶんめいかい化と号いつてひ
けをきかすやうに我われくまでか喰くふやうになりこの實じつは
あつたといふのでこッそれと未まだ小使せうし使しの藝ぎ智ちと云いつ
て子こ人にんがするやうに又また書かが短みづかく食くふことなりや中ちゆう井けい一いつ

手^あが合^あされね^いのヤレ様^{けが}ま^かるのと^けろ^ろね^い種^や書^がと

い^きふ^りの^きい^り論^り理^き学^くを^ま毎^らね^あへ^らふ^あの^まこと^まを^まく^まけ^まス^ま替^まう^まる

夷^あ小^い福^ふ海^{かい}の^あ著^しと^あ肉^{にく}食^じの^あ説^せで^あも^あ漢^{かん}せて^あ子^こ七^し

西^{せい}洋^{やう}小^{せう}や^やア^あそ^そん^んま^まと^とい^いご^ごウ^うせん^{せん} この人こそりませんとい

と^との^とい^い あつち彼^かの^のい^いま^まで^で理^りで^であ^あり^りて^て好^{こう}必^ひく^くま^まら^らう^う ト

の^の船^{ふね}や^や車^{くるま}の^のあ^あり^りけ^けら^らん^んさ^さら^らお^おを^をま^まい^いつ^つと^とい^いん^んご^ご子^こ啓^{けい}示^し

ご^ごら^らう^うト^トろ^ろ傳^{でん}信^{しん}機^きの^の針^{はり}の^の先^{さき}で^で新^{しん}算^{ざん}紙^しの^の銅^{どう}板^{ばん}と

多^たく^くさ^さう^う ふらせん そら は こ り つ こ る と は あ ら わ

とうせんうあれハ子モシ初ハ待ヒとせん人地お
凶ツの中あつに後帯ごんたいとあまありやす國くにがあるが
取とが赤道せきだうといツく日ひの照てりの道ちうイ去地とちうが
あつあつのこゝたぬをねへそを双あつテ坐あつの人ひとが目ひに
て皆まならん樹たサそまじううその坐あつのまがいろ
一風あつをて風船ふうせんといふものを造つくッて大まきまゐい
甲あつ一風あつをちうませく空そらうらちうまそそのあつ
はとひんたちす子こたると二人ふたりまゐらうへあつのまゐ



らしとる

世といふ

ささり

ぬさり

文字

この結

角文字と

おれほつらうね

紀とらこの

ありて石炭をえんく焚くは夏のよみあてに
 大勢の空を音をひききく遠方の通りがどい
 せうナント考つるものサ。何サあゝまゝに文工風の
 の後いぢぢぶく帯で伏せば大に世界の形象は
 渾沌として球の如くと考つるサ。その以ては
 如来が須弥山と考けらるるが西洋人のま
 たる海上を渡りて世界の果てまでまてまて
 とうとうとうとうの海を渡るまでとうとうとうとう

てへいおめーうとまそく切あげたのぞその場ら
きりぬけふが裏紗ゆがわのふの糸をえあわてお穿
がうてひけて寝く寝く運入とまぐぬモシヌぬあや
ふくきまほしう人がうさうさんまヨとほサお茶屋の人
このきまろおんひねの月の三日小田町の毎夫年程
うらこ一人一錠と二會ふ末あぬーこの客とぬまヨ
ト款ぬと糸をうけられうらうらとせえせのふ外
まがつるうらうらうらうら川桑金後成あやぐえ



うきうき
後朝に

見歸り柳

ちのきまま

うしろ

髪を

風

死の

あ

黒牡丹

主人讚

「あゝ」といふことばを林檎トらしきこゝ尾彦のお
 むらひのそやいのや大文字屋の字法あるいの仔細
 大文字の内にもまをを知つて居る。是田屋の
 らんとの傾棟水滸傳の種本を甲子屋の
 流が密のころと相へると榮屋小志とあすこと
 志のうらまはあや楽屋が兄ごちで密あつ
 ちも一うはあそびのせだねうらまると世界と
 やぶつて造買もまてをくが力あるあを入

夕つるてんのきりのとうをまかりしてあふくあふくをみま

手とまきま 詩 夜ハ野ふりつりイとぞひヤ挽ふりて

女間秋水。鉄と断べーイ。人觸きび人と斬る

さぶるとさくるウ。十八交とむまぶ徳児の社アハ

乞ヤク。女子酒エめてとすウイ。こやくそーい

生の和味のよのぬ一四くれシカア。愉快おやく

さうくさあやてとまりふあさむひをハア失致ごめんコヤ

アハ。目赤らうこころう。かまろこ中まおまへト

うちむらひ 若牛肉の至極は好むとまゐさるゝウロ
 〇が僕もその殊実實味のこまぐとぶるイヤか
 〇價沸騰の同勢小及して割烹店まで入るると
 えちう家ハ所謂激發の徒でぶるは牛肉チウ包
 の味極まるのまゝとせ用化儀書の内容料でぶる
 〇イヤ何うとまう〜て失致。おめんコヤく女子
 〇んこうコヤ。あのウナ生肉と十一斤むらり拵菜の
 〇んで。至極の風味と周旋のイてらるゝア酸ス

かゞモシあいらん市愉快。えぞお父養父さいと

十八妻の袂をきゑるとやまうてらんやヨとゑふる

そゝくあるがう新造あう小舟とまりサ松の尾

車さんや連山さんのまろをまろりきくうら

小令花梅の味うらうり子飛のひのほが。え

とあゝのまやうつゝまろであやうくと市就是てう

づいの留がおおそ西洋時計一字三ミウトむうの

ひるがう。娼妓の口。のづ八さんうんさんいぶじな

山東京傳の

取瓶半

勺によりのそ

悪玉丸

雅也とあはれ

空印とあはれ

野

あはれ

附あはれ

このあはれ



まゝらうあんまりひねがとまゝのめどヨとらきして
ハと拘おゆら死お疾お取おぬらちころちうらまうあぢ揚あ貝お
ちえんくまぐちよつうお松おがおむうひふゆねまきさ
づちたきひのー席し下かこんびも羽はせゆしてスタく
あびてきささのサツサ。モシえんどのあまことどもかともぞ
ねとえつるまやアぶんまめにあふちあせやせんヨア、
あんまり志し也えツて咽のどがひつুকやうにありやーと死
つこたつるつれに一ひと帯おつがまねありお元もとつうの女お元もと

うん
刀玄結

かん
あ

は
つひも

横
あつらひ

は
つらつら

あ
ら
は
乃内通号

花
街

美
洒
雄



おまつくがもうだすとの勘次かんじのやらうがいの人
ふくくとおやアがうて二上りふあうだとう湯あがりゆあがりどとら
坊主ぼうしゆ湯ゆをにあげるとやうまつらアおやアがうてあがり
とやぶくさんざつむらさうだちうおやアがう
そのあげあげ勺くが人力車ぢんきまで小塚こづか系一却けいぶそと成なり
かん次かんじの志しとつこれめんおさうをむねとくじをさか
めんどうと棟梁とうりやうも八さんおそまゐりおまつてあ
たが子こコウちもあろうもねく畑はたけ工くピンピンむらうんむらうん

おのぞらうの里は鉢合とさくさくやあかつく仲宿
 合とさくあまのたきこり管さく蹴人をさくべ
 やめて人力の車力でもありやぐねびひととつ
 こちとらや田十づらアさびて色さゆそつけぬ
 されど附合とらやあるが款中やがあらうとゆ
 唐天ちあくうがあめりうのむらねままでゆ
 つめりざああいつとく蹴人のたてがめづりねら
 へいひぶんぶらあやや七十ああるむらにからと

さあ下駄げだ小こや足味あしあじ増ぞやどちがふおきやくめんさあ
 ぐましくきやがりのやまのうてんとくたうてあ
 多おほ賣うりふられてやのやきかひるがうらんのこと
 ども鉄てつ籠かごどもめつてさあをきるのきやねん
 のひがうまやひひくあるらうのウま松まつてあ
 たことさうきやねんウまイいくあめねめ熱あつく
 モウ二合ふたごそくして生な肉ま由ゆりぐやちやくさうウま

○ 生なま文ぶん人じんの會かい談だん



らちかき
は 嘴 を

一言化

一尾

そのしをあげ

おれい
交くら

校の
のり

己意の

まゝ

風流

一葉齋

芳鏡戲筆

福寿の先づ出てあつたる松山松嶽芦海
望の東寧帆雨柳圃隨笔桂渺波山の法先生
不承知をやくせひふ出席せねがはしく
字の善公と後小路の一庭が仗若小暮この止せ
不承出るひととろろが者れ五枚がひの一局へ合儀
一杯のむが君やぶらう先生おあとでねがひますと左
あう扇面の絵ぶらぬサさてらるさいとごとキヨツと
あつたひとにわらわらとて由舎互一の義はと祝意

多く書画の授交ても扇画が二百疋唐紙さう五百疋
 と極れがついてある統と一云の礼のを先四五本々せ
 らせとて必ひまゐの僕がかゝるの指まつりて雲霧のこ
 ろく紅巻くお終を一本づらう徳先生あゝせんせいの合作でござ
 いますすう一寸おつひますのヤレ遠隔ううたの書画返
 書画帖あゝごんじとあたあまお扇紙せんしの山とほらつらう
 らるさのそや、切あけて鏡かがみやうと身みせんまくとせ
 らるさのそや、切あけて鏡かがみやうと身みせんまくとせ
 らるさのそや、切あけて鏡かがみやうと身みせんまくとせ

若^{わか}が後^ご日^{にち}と^として^{して}学^{まな}公^{こう}の^のを^をと^とひ^ひの^のて^てね^ねま^まあ^あ出^でて^てだ^だが
 ち^ちの^のり^り各^{おの}々^{おの}と^とん^ん中^{ちゆう}を^をあ^あゆ^ゆめ^めら^らく^く牛^{ぎゆう}店^{てん}と^とま^まめ^めら^ら中^{ちゆう}村^{むら}
 の^のか^か自^じひ^ひす^すれ^れと^とそ^そろ^ろより^{より}落^{おち}つ^つい^いて^ての^のめ^める^るく^くめ^めど^どと^とナ
 相^まあ^あづ^づ美^み木^き氏^しの^の我^が程^{ほど}も^もた^たん^んが^が子^こま^まと^と来^き月^{げつ}の^の初^{はつ}
 日^{にち}の^の第^{だい}八^{はち}で^で虚^{きよ}室^{しつ}の^の展^{てん}覧^{らん}会^{かい}二^に日^{にち}が^がカ^カウ^ウト^ト寺^{てら}橋^{はし}の^の栞^{しり}
 隣^{りん}室^{しつ}で^で席^{せき}画^がの^の約^{やく}速^{そく}ア^アくる^{くる}ま^まい^いく^く実^{じつ}の^の字^じ名^な家^け
 西^{せい}の^の畑^{はたけ}グ^グー^ーと^とモ^モウ^ウく^く名^な写^{しゃ}ハ^ハ瘠^{せつ}ま^まど^どく^くヲ^ヲウ^ウと^と
 ち^ちの^のと^とら^らく^く

發行

書林

京都三條通柳馬場

大坂心齋橋通南久宝寺町

△ 備後町

△ 安土町

△ 尾張名古屋本町三丁目

△ 二丁目

△ 東京日本橋通二丁目

△ 二丁目

△ 芝神明前

△ 全

△ 全

△ 横山町三丁目

△ 浅草茅町二丁目

△ 八丁三丁目

堺屋仁兵衛

伊丹屋善兵衛

近江屋平田

河内屋忠才

菱屋藤兵衛

菱屋平兵衛

須原屋茂兵衛

山賊屋佐兵衛

須原屋新兵衛

岡田屋嘉七

和泉屋市兵衛

和泉屋金右衛門

須原屋伊兵衛

虎

